

独 善 の 記

宰 府 倂

毎年のことだが年末年始の、あわただしく過ぎ去り目出度く迎える此の時期に、酪農に志す方々が実習においでになっている。

俗称搾乳実習という名で呼ばれている。

1週間から10日間位の期間搾乳牛舎に勤務し、牛乳搾りを体験し乳牛の飼いつけ、ボロ出しなど一連の牛飼作業を習得するわけである。

しかしあくまでも、その主眼は搾乳技術の体得熟練ということで、さればこそあわただしげな年の瀬から新年にかけてこの時期をよそにして、家路を遠く場内で生活するに何の魅力があろう。と私は思っている。

だが、此の搾乳という格別の技術が必要でもない、単に指先の機械的な経験にすぎざる動作の習得に魅力をもって、しかも7日から10日という短期間でかなり満足感を味わうという、得体の知れない実習者の考えに、いささか疑問がないでもない。

勿論この搾乳実習受入れ側にも考え直す点があるうと、第三者の人人は申し出られるにちがいないと思うけれども、実は搾乳実習だけが目的で、そのみをねがって来場される次第であれば、御了解いただけると思う。

牛から乳を搾ることを習うことは、いとも容易で、むしろ土から乳を搾る技術を習うことをねがって何故実習にこないのか、不思議の限りである。

かつて、蒜山の酪農指導をやっていた頃、黒牛しか知らなかった御婦人が、ジャージー牛の乳頭の短かい乳房を目の前にして、思案困惑の日が続いたとはいえ1週間で結構搾乳のコツを習得していたことを思い出し、搾乳実習者の感覚に、幾分アヤシキものを感じる。

目下試験場内に酪農に関する技術の短期講習のための設備が建設されつつあり、3月頃からその講習が開催されることだと思うけれども、前車の轍をふむことのないよう老婆心ながらも注意しておきたい。

短期間であるけれども酪農講習のネライは、牛から牛乳を搾る事ではなからう。

新年早々、他人にケチをつけることで書き出したが、ついでに続けよう。

此の場を訪問する人々の数は年間5,600人でそのシーズンにでもなれば、約30町の場内は、殷賑を極めて

おる次第。

老幼男女、善人悪人が集い、観光地位の考えの者から酪農のメッカとまでもゆかないにしろ、あれこれ勉強しようという考えの者まで、巾広いようである。

ともあれ客人の足繁き事は、存在の価値が認められている確証であるから、いとも丁重、親切に御接待申し上げることが肝心であろう。

ところがである、これら参観見学の方々の99%は、過去において、牛舎を見、乳牛を見て御満悦のようである。私自身の商売柄に合わないから、こんな皮肉な表現をしているのではない。むしろ御接待の面倒がなく結構至極なんだけれども、折角の見学が、十分な効果をあげていないのではないかと思うからである。

一体、莫大な資本を投下して作った畜舎をみて、何の利益があがるかということである。むしろ乳牛本位に理想に近い設備建物に眩惑され、その挙句が、やれスタンチオン式にしなければ、ウォーターカップが必要だ。ミルカーを買う、といった自分の経営を度外視して、資本に無理をする。

乳牛の素晴らしいやつを見る。するとそれがほしくなる。現在の乳牛飼いが充分好調子にいつていなくても、我関せずで、種畜生産者ライクな真似を試みる。

これは、私が想像する悪の例であってくれればよいのだが。

勿論、見学者のみが悪いというのではない。

此のような事態を惹起するにふさわしい培地を、かつて軍国主義遂行のための産馬政策にあずかり、その時代に畜産を取りあげた獣医諸兄の独善が、あずかって大きなものではあるまいか。

ともあれ酪農試験場は、農業経営における酪農組織確立の問題を取上げる場であろう。

従って、牛を見、牛舎を見るのは無論結構この上ないけれども、今少し深みのある見学を願いたいものである。

短期講習が開講される日の近づくにつれ、「新しい皮袋には、新しい酒を入れなければならない」という理が受講生は無論、講師諸公の間に今一度考えられなければならないことを、ふと思ひ気づかい駄文を草した次第。